

19世紀西洋図像新聞から見る

東アジア黄禍論の視覚言説

—— Harper's Weekly における排華図像を中心に ——

陳 其 松

Visual Discourse of Yellow Peril
in 19th century Pictorial Newspapers

CHEN Chisung

In 19th century America, the Yellow Peril was aware comparatively earlier than other European country. After 1848's gold rush, thousands of low-salary Chinese workers flood into California, and the tense between white and Chinese workers elevated. The conflict was reflected in the plenty anti-Chinese reports, caricatures in 19th century American pictorials. Through close analyzing of the famous New York based pictorial, *Harper's Weekly*, I would like to, first, reinvestigate the publication of anti-Chinese pictures in the newspaper. Second, by close analysis of each selected picture, reveal the mechanism of building the negative image of Chinese workers, who were portrayed as loaf, drunken, and evil others.

はじめに

1895年ドイツのヴィルヘルム2世自身の考案による、クナックフースに作成を命じた「黄禍図」というのは、言うまでもなく、アジア人が欧米人を圧倒するとするいわゆる「黄禍論」に関する最も有名な絵画である。日本と仏教の脅威を危惧していたこの寓意画は、黄禍論のシンボルとなり、



【図1】 ヨーロッパの諸国民よ、汝らの信仰と祖国の防衛に加われ！¹⁾

世間に広く認識された。無論ヴィルヘルム2世の「黄禍図」(【図1】)が出現する前に、西洋社会にはすでに黄禍論に関する言説が流布していたと考えられる。しかも「黄禍論」の言説は、社会のエリート層の中にしか共有されていたのではなく、新聞、著書など様々なメディアより一般民衆へも発信した。やがて黄色人種への敵意と恐怖は、オリエンタル印象の一大風潮まで発展した。それで、19世紀から20世紀にかけて、黄禍論を表す数多くの記事、絵画、小説などが派生した。その時代に生み出された黄色人種への恐怖、排斥は、エリート層の中に広がったものだけではなく、西洋社会全体に共有されたオリエンタルイメージの一つである。当時盛んになった新聞紙は書籍より入手しやすく、広く読者層があり、一般民衆の認識構造などが反映できる資料だと言える。そして東アジアの記号・印象・言説は記事、図像など多元的なルートにより発信、再生された。

黄禍論言説について、すでにゴルヴィツァー²⁾、羅福恵³⁾、などによる先行研究があるが、殆どは文字資料を中心に論述するのみで、「図像」情報は殆ど見過ごしている。しかし、「言説」を構成する要素は、文字だけでは考え

1) 図像はWikipediaより引用。http://en.wikipedia.org/wiki/File:Voelker_Europas.jpg

2) ハインツ・ゴルヴィツァー (2000)、『黄禍論とは何か』(瀬野文教 訳)、東京:草思社

3) 羅福恵 (2007)、『黄禍論』、台北:立緒文化

られない。「図像」など視覚資料は時に文字から独立し、情報発信を加担すると思われる。飯倉章⁴⁾は19世紀後期から20世紀のロシア、ドイツ、日本などの新聞図像にも目を配ったが、19世紀中葉の図像新聞については言及していない。

上記の問題意識を踏まえ、本稿は、アメリカの *Harper's Weekly* 図像新聞を調査し、図像化された黄禍意識は、如何に新聞紙を通じ、西洋社会における黄禍論の視覚言説の一部になったかについて論じていきたい。

1. 19世紀西洋新聞に見る「黄禍的」東アジア図像

A. 各国新聞からみる図像掲載の傾向

19世紀の図像新聞によると英国、仏国、米国がそれぞれ異なる文脈の中で「黄禍」という概念への反応が見受けられる。イギリスは18世紀から「太陽が沈まない帝国」と称され、世界で最も広大な植民地を有した強大な帝国であったゆえ、「黄禍」という意識への目覚めは1895年の日清戦争以降から見られる⁵⁾。フランスではアメリカにおける移民問題の影響を受け、イギリスより早く中国、日本の動向に注目されたが⁶⁾、「黄禍」が争点になったのは19世紀末、清仏戦争の刺激を待たなければならなかった。その内、最も早く黄色人種からの脅威を感じたのはやはりアメリカである。1857年から1888年の *Harper's Weekly* によると、中国人と関連する風刺漫画は多数見いだすことが出来る⁷⁾。次に時間系列に沿い、*Harper's Weekly* に見る黄禍論的な新聞図像の言説を紹介していきたい。

4) 飯倉章 (2004)、『イエロー・ペリルの神話—帝国日本と「黄禍」の逆説』、東京:彩流社

5) 羅福恵 (2007)、『黄禍論』、台北:立緒文化、133-134頁

6) 1878年、ハワイで外交官として務めたクロニエ・ド・ヴァリニーによる『中国人の侵入とアメリカ合衆国の社会主義』という論文を発表し、カリフォルニア州への中国移民問題について警鐘を鳴らした。

7) 【付録】を参照されたい。

B. アメリカの排華運動と「黄禍」

アメリカにおける中国移民の大量移住は1840年代末のゴールドラッシュによる労働力不足と関連した社会現象であった。1848年、カリフォルニア州で金鉱が発見されて以来（【図2】【図3】）、労働力を供給するため、中国人労働者を大量に導入した。当時中国から渡米する乗船料は12ドル⁸⁾～40ドル⁹⁾であり、それはアメリカ東海岸から、さらにヨーロッパからの移民よりも安価であった。更に白人よりも低賃金の中国人労働者には大きな利点があった。そのため中国人労働者数は年々増加し、1860年にカリフォルニア州全人口の9%に達している¹¹⁾。



【図2】 カリフォルニア州産の金鉱¹⁾



【図3】 カリフォルニア州産の金鉱¹⁰⁾

中国人労働者の大量導入は言うまでもなく、白人労働者にとって極めて脅威的な存在となった。早くも1850年代から双方の衝突が頻発した。1870年代には中国移民への排斥運動が組織的に展開され、例えば1873年サンフランシスコの人民保護同盟、1877年のサンフランシスコ労働者組合の結成¹²⁾など、時勢の流れが読み取れる。1885年ワイオミング州ロックスプリング

8) 「皮克斯利的證詞」、『黄禍論歴史資料選輯』、26頁

9) 「羅傑斯的證詞」、『黄禍論歴史資料選輯』、40頁

10) *ILN*, 1850.01.26、同註8

11) 木原聖子(2004)、「アメリカにおける黄禍論の展開：1840年代～1924年」、『人文科学研究所』0(35)、90頁

12) 木原、前掲書、90頁

で起こった中国人労働者虐殺事件はその社会不安の頂点だったと言える。

C. 中国人に巡る「黄禍的」図像言説の展開

同時代の *Harper's Weekly*¹⁴⁾ を見ると、アメリカ社会における「黄禍」意識の萌芽が如何に新聞図像に現れているかが明らかにされる。1869年9月4日、*Harper's Weekly* が【図4】を掲載し、下記のキャプションが付けられた。

“The Genie, slowly rolling himself out of the box in the form of vapor, soon assumed his proper proportions. The Fisherman stood aghast on beholding the gigantic size of the demon he had liberated.”-Arabian Nights' Entertainments



【図4】 THE CHINESE PUZZLE¹³⁾

上記の文字は千夜一夜物語のなかの「漁師と鬼神との物語」から引用している。ある漁師が、偶然に封印された壺を手に入れ、開けたら巨大な鬼神が現れ、漁師を殺そうとしたという物語であった。【図4】はこの物語でアメリカが直面した中国人労働者の問題を風刺したものである。漁師に当たるスーツ姿のアメリカンの目の前には、自ら封印の箱から解放された中国人風の「悪魔」(demon) が現されている。カリフォルニアの土地に立つ巨大な「悪魔」が手を組みながら、事態の発展にあまりにも無力なアメリカンを見下ろしている。労働力の不足で最初は移民に対して開放的な態度

13) *Harper's Weekly*, 1869.09.04

14) ニューヨーク系の新聞紙。南北戦争の時、北軍への熱狂的な世論支援で有名。内戦後、トーマス・ナストが中心とした時勢を斬る風刺漫画で評判を博し、「ワッスプ」などの新聞紙などと、19世紀アメリカの重要な図像新聞が掲載された。

を取ったアメリカは、いつの間にか事態の展開がコントロールできなくなり、進退両難の窮地に落ちたことを見事に千夜一夜の話で喩えた。しかも、地平線の彼方に見える続々と来航して来る船は「CHINA」という旗を掲げている。それをなんら抑止する策がないと言う事態を更に悪化させることを表示している。ゴールドラッシュから20年、*Harper's Weekly*に見るアメリカの「黄禍」意識はこの図を始めとして次々と登場する。

1869年9月25日に掲載された「家族の新メンバー」(The Last Addition to the Family、【図5】)も黄禍の意識が強く表現された一枚である。画面の中央に座った女性が赤ん坊を抱えている。この構図は、すぐに「聖母子図」という伝統的画題を想起させるであろう。ただし、この鎧を纏っている女性は、慈愛なる聖母より、たくましい印象が見受けられる。そして兜の上に鷹のフィギュアと星の装飾や、星とストリップ模様のガウンから、この人物の正体は擬人化されたアメリカであることがわかる。彼女が可愛がっている子供は辮髪で、中国風の綿入れと布靴は着用しているから、間



【図5】 THE LAST ADDITION TO THE FAMILY¹⁵⁾

違いなく中国人を指している。だが、キリストのような純粋で無邪気であるはずの赤ん坊の顔つきはあまりにも醜悪である。まさに人にあらず、妖怪というべきであろう。彼は右手の親指を口に銜えようとし、まるで「母親」に哺乳を促しているようである。しかし、これほど妖々しい子供に対しても、「母親」は平然で、慈愛深き聖母のように微笑みながらこの「家族の新メンバー」を可愛がっている。

【図5】は【図4】よりはっきりと中国人移民問題の本質は資源の争奪にあることを

15) *Harper's Weekly*, 1869.09.25

表現した。言うまでもなく、「新メンバー」というのは中国移民である。ただし、彼らは必ず歓迎すべき存在ではないようである。貪欲で、邪気が溢れる悪魔の子はいつかアメリカの資源を吸い尽くすという恐怖こそ、この「聖母子図」の真の画題である。

社会衝突が高まる一方、アメリカにおける土着主義運動（nativism）の展開も白熱化した。特にノー・ナッシング党（Know-nothing Party）とその後継のアメリカ党（American Party）はその代表的な組織であった。1870年7月23日の【図6】、「彼らの架けた梯子を外す」はその不満を露骨に描いた。アメリカ人が武器を持ち、城壁の上に群がっている。その中に壁のてっぺんに立ち、ガッツポーズをとっている人もいる。壁には「アメリカ合衆国を守る『中国壁』」(The “Chinese Wall” around the United States of America) と書かれている。壁から、「移民」(emigration) の梯子が蹴り飛ばされ、そのまわりに慌てて逃げたり、荷物を持ったまま、茫然と城壁を見上げたりしている中国人が見られる。

前述のように、1870年代は中国人排斥運動が組織化された時期であり、【図6】に描かれたシーンがまさにその背景を物語っている。【図4】と【図5】の中の無力で、無防備なアメリカ人の形象は、強硬な手段を講じる過



【図6】 THROWING DOWN THE LADDER BY WHICH THEY ROSE¹⁶⁾

16) *Harper's Weekly*, 1870.07.23

激派に一変した。この「中国壁」(Chinese Wall)は万里の長城を連想させるが、あまりに皮肉にも今度は中国人の方がこの城壁を拒もうとした他者である。城壁に掲げられている旗に、「KNOW-NOTHINGS' —1870—」と書いてあるように、1850年代主にカトリック系アイルランド人への敵意から誕生したノー・ナッシング党の土着主義精神は、依然としてアメリカ社会の底流にあり、そして1870年代に「黄禍」意識に転換し、再び中国移民問題という捌け口から噴出したことを示している。

左下のサインにより、この漫画の作者はトーマス・ナスト (Thomas Nast, 1840-1902) であることが確認できる。彼の精力的活動により、ニューヨークの政閥、ウィリアム・M・ツイード (William M. Tweed, 1823-1878) の汚職事件が起訴された¹⁷⁾。世相を斬るイラストは庶民層に多くの支持を得て、Harper's Weeklyの看板絵師でもあったナストは1870年代から1880年代にかけて、このような風刺漫画を創作し続けた。後に紹介する【図7】【図9】【図10】も彼の手によるものである。



【図7】 A DIPLOMATIC (CHINESE) DESIGN PRESENTED TO U.S.¹⁸⁾

17) この事件は海外からも関心が寄せられた。イギリスの図像新聞誌「グラフィック」(*The Graphic*)が1876年10月28日の「W.M. ツweed逮捕」(*The Arrest of W.M. Tweed*)という記事に、ナストの活動と彼のツイード批判の挿絵を数点掲載した。

18) *Harper's Weekly*, 1881.02.12

D. 「龍」から「ドラゴン」へ

中国人移民問題の深刻さは、やがて地域問題から政治問題に発展した。1875年、中国、日本、モンゴルの犯罪者と娼妓の入国を禁じ、1876年カリフォルニア州参議院が5名の参議員で委員会を作り、中国移民問題について調査した¹⁹⁾。報告書に、カリフォルニア州参議院マック Coppin (Frank McCoppin, 1834-1897) は明確に法律で中国人の移住を制限することを建言した。1879年、カリフォルニア州の市制機関と会社による中国人雇用が禁じられた。1880年の中国移民取締条約には、アメリカの利益を害し、社会秩序を崩す場合の取締、制限、中止は認めるが、中国移民の完全禁止は行わないという内容であった。当然、この条約をアメリカの反移民派が認めるわけにはいかなかった。

1881年2月12日の「アメリカに提示した、(中国の) 外交構図」【図7】は、中国移民をより強く制限するようにとアピールする風刺漫画である。中国が如何に禍の象徴として描かれているかは一目瞭然である。大きな中国風の飾り瓶に、一匹の龍が巻き付いている。龍の右の爪に握られている竜の玉に「外交」(diplomacy) と書かれている。巨龍は、意味深げにニヤリと微笑みながら、左の爪で「新条約」(new treaty) の紙切れを瓶の中に入れようとしている。龍の重さに耐えるように、ヒビが入っている瓶に様々なシーンが描かれている。右に巨大な龍尾に驚き、尻餅をついた人物は聖ゲオルギウス (Georgios, St. George) と、胸の名札でわかる。さすが聖書に悪龍退治の物語で有名な聖人でも、桁外れの巨龍にお手上げのようである。瓶の下端に損傷が一番酷い部分は「アヘン貿易」(Opium Business) と書いてあり、その辺にアヘンを吸引する二人の中国人が見られる。さらにその右に一隻のアヘン輸送のアメリカ汽船がある。以上のシーンが、外交と条約を後立とした中国に憑かれたら、アメリカ社会は如何

19) その調査結果は「Report of the Joint Special Committee to Investigate Chinese Immigration」という報告書にまとめた。



【図8】 黄龍旗（三角）



ST. GEORGE DOES NOT SEEM PLEASED WITH THE DRAGON CIVILIZED.
The first Chinese steamer has arrived in the Thames.—(See Page 43.)

【図9】 ST GEORGE AND THE DRAGON²¹⁾

に大混乱に落ちるかを予言している。

1868年アンソン・バーリングゲーム（Anson Burlingame, 1820-1870）が、清末最初の公式使節団を率い、アメリカを訪れた時、黄色い生地に龍のモチーフの「黄龍旗」（【図8】）を用いて以来、「龍」は中国の象徴としてしばしば使われている。しかし、中国では、天子を代表する聖獣、「龍」は、西洋の「黄禍言説」のコンテクストにおいて、「ドラゴン」（dragon）と混同されたことが、【図7】を見れば明白である。例えば、【図7】の龍の形態は、「黄龍旗」（【図8】）の龍と似ているものの、【図8】の「龍」は爪が5つあるのに対し、【図7】のには3つだけとなっている。意地悪そうな微笑と口から垂れた舌は、聖のどころかむしろ「宝物など物欲の守護者、神の思龍の妨害者…悪と暗黒の力の形象化」²¹⁾ というべきであろう。

「龍」で中国を喩えるイラストは他にも例が見られる。1882年1月28日の「聖ゲオルギウスとドラゴン」（St. George and the Dragon²²⁾、【図9】）を

20) *Harper's Weekly*, 1882.01.28

21) ブリタニカ百科事典の「ドラゴン」の条による。

22) 【図9】の背景は最初にロンドンと上海の間を結ぶ汽船航路である。ただし、貿易を求めに来た最初の汽船「Meifoo」は歓迎されるどころか、恐慌でも起こすかもしれないと、記事がイギリスの新聞紙を引用しながら述べた。その理由は：「もしこの航路の開設が成功すれば、ロンドンが忽ち数千の中国移民により溢れるようになる

例として挙げよう。下端のキャプションに、「ドラゴンが開化されても、聖ゲオルギウスのご機嫌を取れそうもない」とある。図を見ると、テムズ川のポートに、一隻の汽船が停泊している。「MEIFOO」という中国風の名前と船尾に「黄龍旗」と龍の装飾が見られることにより、中国船である事がわかる。米、お茶と生糸が大量に積載されているようだが、なかなか荷揚げができないようである。なぜなら、一人の鼻が高そうな紳士が不機嫌に、目の前にいる中国人船主を睨んでいる。船主は一生懸命に営業スマイルをしながら、両手を胸の前に合わせ、従順のように見えるが、よく見ると、大きく開いた口の中に、もう一つ他の動物の顎がある。この人間の皮をかぶっているのは、無論、「開化されたドラゴン」(civilized dragon)であろう。

ナストは、【図9】において、聖ゲオルギウスとドラゴンの物語と、中国とイギリスの貿易の対立関係を喩えることを再び取り上げた。「開化されたドラゴン」とは、あくまでも人間の皮をかぶる化物にすぎない。ドラゴンの企みを見破った聖ゲオルギウス²³⁾は、イギリス帝国を守るためにドラゴンと対峙するという設定である。ただし、ここで注目したいのは、ドラゴン退治物語にあった「英雄」と「化物」の対立関係のほかにも、もう一つ「文明」と「未開」の構図である。いくら汽船が持ち貿易を行おうとしても、所詮西洋の真似にすぎなく、「文明」の本質は、必ずスーツ姿の紳士が代表する西洋にある。文明の衣を着ていても、神秘、野蛮、貪欲な「ドラゴン」こそ、中国の「本質」であると、【図9】が訴えている。

【図9】に見る「黄禍」意識は、もはや単純な国益衝突によるものではない。中国の「文化」と「民族性」を規定することにより、中国移民を排斥する理屈を正当化した動きが、60年代、70年代より目立つようになった。文明と民族性へのオリエンタル想像は西洋中心的な原理主義と結びついた

であろう。」

23) イギリスの守護聖人は聖ゲオルギウスであり、現在のイギリス国旗に、イングランドを代表する縦横の赤十字も彼に由来したものである。

からこそ、「開化されたドラゴン」が生み出された理由である。

1882年3月18日の「中国人が文明を受け入れてほしい。それなら彼らはいさせる」(Let the Chinese embrace civilization, and they may stay, 【図10】)も前述の中国民族性への想像文脈に沿い、中国人の「非文明」的な行為を列挙し、揶揄嘲弄するのである。図面は9つのシーンに分けてある。中央に、ウイスキーのボトルと抱き合う、アルコール中毒者のような中国人が一番目立つ様相であり、周りの各シーンに、またそれぞれ「飲酒」(drink)、「喧嘩好き」(fight)、「怠け者」(loaf)、「物乞い」(beg)、「ストライキ」(strike)、「饒舌」(talk)、「投票」(vote)などのテーマが書かれてある。【図10】に見る中国人は、いつも喧嘩したり、泥酔で、街灯で体を支えたり、肥満なのに、「私は飢えている」(I am starving)と物乞いをしたり、「高収入、仕事なし」の札を掲げ、ストライキで訴えたり、選挙のルールも知らずに、5枚の投票用紙を投票所に行ったりするなどから、まるでアメリカ社会にとって、迷惑の集合体のようである。

排華気運の最高潮に掲載された【図10】に見られるのは、中国人の「悪質さ」を読者にアピールする思惑があった。飲酒、喧嘩など社会秩序に反



【図10】 LET THE CHINESE EMBRACE CIVILIZATION, AND THEY MAY STAY²⁵⁾

24) *Harper's Weekly*, 1882.03.18

する行為のほか、特に「怠け者」という非難はかなり目立っている。仕事をサボる上、賃金に不満を抱き、不労で高収入を得ようとするなどのシーンは、中国人が「労働者」としての居留に対する、疑い深い指摘である。

ただし、中国人に対する疑いは、労働者としての質にのみならず、中国という民族が「文明的」になる可能性も問われている。【図10】のキャプションに、「中国人が文明を受け入れてほしい」という言い方は、恐らく中国人が実際にアメリカ社会の一員になるのを期待しているわけではない。むしろ、「到底中国人にとっては無理だから、さっさと出ていけ」のほうが本音であろう。ここでは、【図9】にも触れた中国民族性への疑いが見られる。どれほど事実であるかを別にして、【図10】に見る、アメリカの社会良俗に反する中国移民の迷惑行為は、もはや個人の教養問題より、中国の民族習性にこそ問題があるとされていた。

【図10】が掲載された約3ヶ月後の5月6日、10年間の中国移民の入国を禁止する排華法案（Chinese Exclusion Act）が可決された。この法案がその後2回延長され、1904年に法律適用の年数制限を取り除き、1943年まで中国人移民が拒まれた。しかし、排華法案が成立したとはいえ、すでにアメリカに移住した中国人労働者と白人労働者との緊迫関係は旧態依然のままであった。1885年9月3日、ワイオミング州において中国人労働者の惨殺事件が起こった。最初は数名の中国人と白人労働者との口論が、白



【図11】 THE CHASE OF THE CHINESE²⁶⁾

25) *Harper's Weekly*, 1885.09.26

人による大規模な中国人虐殺に発展した。後に州政府の介入により、中国人労働者の保護と賠償、暴乱の指揮者の処罰と追放で事件が収束したが、同年9月26日の *Harper's Weekly* に「中国人攻撃事件」(【図11】、The Chase of the Chinese) というタイトルで事件の始末を報道し、白人労働者の暴行を厳しく批判した。この不祥事で、先に掲げた図像に見られる中国移民への不満、蔑視、危惧などは、やはり根強く民衆の認識に潜み、簡単に消滅することがないと強く語っている。

おわりに

上述のように本稿は、*Harper's Weekly* と言うアメリカを代表する図像新聞を一事例とし、19世紀中葉のアメリカにおける一般民衆の間に流布した黄禍論図像の言説について考察した。

19世紀中葉から末期にかけてのアメリカにおいて西洋各国の中でも比較的早く「黄禍」という意識が萌芽した国である。1840年代以降に見られるゴールドラッシュと大陸横断鉄道の建設のための労働力不足を補うために導入した中国人労働者は、現地の白人労働者にとっての強力な競争者となり、両者の衝突が展開された。そのことは本稿に掲げた図が象徴的に語っているであろう。先学が文字資料に依拠して論究されたアメリカにおける「黄禍論」が、図像新聞にも明確に表示されている。

ただし、中国に対する黄禍論の図像言説は文字言説とは違う表現構造あることが、本稿の分析によって明らかになったと言えるであろう。例を上げれば、「龍」という中国を代表する幻想的生き物が、西洋の「ドラゴン」と混同されていることがまさに興味深い現象と言える。「神聖」と「権力」の象徴である龍が、形態が元のままであっても、モチーフとしては完全に西洋の「ドラゴン」に取って替わられた。「龍」と「ドラゴン」、東と西それぞれの異なる文脈に発生する記号を意識的に転用するのは、未知なる「異文化」を、読者が熟知している「恐怖」で語るための効率的な策略である。

禍の「ドラゴン」と未知の「中国」との繋がりが意識に定着すれば、「黄禍」言説の理屈も通じるようになった。ナストのイラストが庶民の人気を博した理由も、図像で政治主張を分かりやすく語ることにあったかもしれない。

もう一つは、中国人排斥の言説は、最初の経済脅威から、中国人の民族性、文化への懐疑に発展した傾向が見られた。自由市場のメカニズムに従えば、低賃金で働ける中国移民は間違いなく白人労働者より競争力が高かったのである。自由、平等を立国精神としたアメリカにおいては、「白人の競争者」という都合のいい理由で中国人を市場から排除しようとするためには、明らかに不十分である。一番効率的な方法は、彼らの労働者としての質を疑問視することであった。そのため、中国人の「怠け（怠惰）」、「非文化的」などとする言説が作り上げられた。そのために【図9】と【図10】に見られるような、中国人の文化と民族性を非難する図像が用いられたのである。

西洋における黄禍論と、東アジアにおける「黄禍論」に関する議論とを比較した場合、東アジアでは「黄禍論」は幻想にすぎないとする「黄禍論幻想説」が主流であろう。ところが19世紀中葉のアメリカにおいて「黄禍」に対する危惧は真実味が帯びている。本稿に掲げた黄禍図像は、アヘン戦争以降、中国の低賃金労働力のアメリカ市場への参入により、西洋諸国に経済的衝撃を与えたことに対する反応の一つと考えるのも良からう。当然、中国人＝災いという誇大描写は政治的意図があったことは否定できない。ただし、それで「黄禍言説」が西洋側の一方的な幻想であると主張するのも、短絡的な東洋中心主義に流れる恐れがある。むしろ、黄禍論は東西の文化交渉のねじれを背景とした言説の拮抗の中から誕生したと考えたほうが妥当であろう。ここでは、いつも「西力東漸」と語られた中国近代史の構図とは対峙もしくは相違する側面を伺うことができる。ただ「黄禍論」言説は地域、時期、国により、それぞれ大いに相違する様相を呈していると言えるであろう。

【付録】：1857-1885年 *Harper's Weekly* に見る「黄禍論」関連図像

日付	記事題名	頁	内容
1857.10.31	Touching Illustration of the effects of American Institution on the Celestial Mind	704	風刺漫画
1865.10.28	THE CHINESE GIANT	677	中国の巨人
1868.06.13	THE CHINESE EMBASSY	376	風刺漫画
1868.06.20	CHINESE MANNERS	391	風刺漫画
1869.06.12	PACIFIC RAILROAD COMPLETE	384	太平洋鉄道の開設
1869.07.10	JOHN CHINAMAN IN SAN FRANCISCO	439	風刺漫画
1869.09.04	THE CHINESE PUZZLE	576	【図4】
1869.09.25	THE LAST ADDITION TO THE FAMILY	624	【図5】
1870.07.23	THROWING DOWN THE LADDER BY WHICH THEY ROSE	480	【図6】
1880.03.20	BLAINE'S TEAS (E)	192	風刺漫画
1881.02.12	A DIPLOMATIC (CHINESE) DESIGN PRESENTED TO U.S.	100	【図7】
1882.01.28	ST GEORGE AND THE DRAGON	63	【図9】
1882.03.18	THE SENATE AND THE CHINESE	162	風刺漫画
1882.03.18	LET THE CHINESE EMBRACE CIVILIZATION, AND THEY MAY STAY	176	【図10】
1882.04.01	E PLURIBUS UNUM (EXCEPT THE CHINESE)	207	風刺漫画
1882.04.08	"THANK GOODNESS! WE ARE RID OF THESE HORRIBLE CHINESE"	215	風刺漫画
1882.05.20	FROZEN OUT	311	風刺漫画
1884.12.27	ON EARTH PEACE, GOOD-WILL TOWARD MEN		風刺漫画
1885.09.26	THE CHASE OF THE CHINESE	637	【図11】

* 本稿が参照した *Harper's Weekly* は、1857年-1876年分は関西学院大学図書館、1877年-1888年分は一橋大学図書館に所蔵されたものに依拠した。